

市民が取り戻した青空～公害の経験を糧にして～

四日市に住む僕にとって見慣れた風景であるコンビナートが、かつて四日市公害の原因となりました。今回は、四日市公害のレポートです。

四日市と聞いて何を連想しますか？ 僕は、万古焼き、お茶、最近では、とんてきもありますし、東海道の宿場町でもありますね。水がきれいだから日本酒もおいしいし、空気が澄んでいるから、青空も星空もきれいなイメージですが、全国の人々のイメージは四日市公害。昔の悲しい出来事がいまだに四日市のイメージなんて四日市市民としては残念です。そんな悪いイメージを払拭したい。どうして四日市と言えば公害なのか、今回はそれを探ります。

四日市公害を知ろうと磯津にやってきました。かつて最も多くの公害によるぜんそく患者を出しました。この町で何があったのでしょうか。

野田さん

「寒い日に海で船で働いたから、かぜでもひいたんか、肺でも悪くしたんかと思っとった。ところがそれはちょっともおこってこないし、この町として、同じ患者が 10 人も 20 人も 30 人も出て、町の診療所でみてもらったら、ぜんそくのような状態やと、だけどぜんそくやと言われたときにね、なに言うとりんかなと思った。が、それが、企業による大気汚染が原因だと聞かされて、これはとんでもないやないかと思っただ。その発作が起こってくるということは、首を絞められるというね、たとえににとるかなあと思う。気道が亜硫酸ガスにおかされて腫れてくんのや。気道の内側が腫れて空気の通り道がせまくなるから苦しくなる。ぜんそくの人が死んだ現場にわしもおったけどね、みるみるうちにのどがね、ばぁーとふくらんできた。」



日本で初めてできた石油化学コンビナート。公害の原因になるとはだれもわかりませんでした。異変はすぐに現れました。

野田さん

「それがねえ、初めて異変として現れたのは奇形というね、水俣で捕れた魚みたいなね、首の曲がった魚やった。においがね、排水を吸っとる魚はにおいがどうしようもなかった。塩浜小学校でもマスクをしたりうがいをしたりしてなるべく悪い空気を吸わんように予防しとった。」

野田さんは、磯津に住む漁師でした。若い頃からこの海で漁をしてきました。でも、コンビナートができてから次々にぜんそく患者が増えていきました。野田さんは、そんなぜんそく患者の一人として、公害や企業とたたかうことになります。

澤井さんは、四日市公害が問題視され始めた頃から、公害と住民のかかわりを写真に撮り続けてきました。

澤井さん

「このへんでね、野田さんが背骨の曲がった魚がとれるのやと言うから、まさか、って言うたら、じゃあ、体が調子のいい日に、俺が投網を打ってやるって言って、この辺ですわ、投網をしてくれたら、まあ、セイゴでね、とれるとれる、背骨の曲がった魚が。そのときは確かに恐怖を感じて、写真を撮りました。



ぜんそく患者さんというのはね、野田さんを含め、塩浜病院の空気清浄病室に行っていたんでね、やっぱり、ずいぶんとひどい発作を起こしていた。小学校3年生の女の子が、夜中すぎ、明け方に発作を起こすんです。その子の家に行くと、たたみからたんすからひっかきあとがたくさんあった。なんでだって聞いたら、苦しいんでもう母ちゃん何とかしてくれって言うんだけど、まあ、背中をさするかね・・・そんなことしかしてやれない、カメラ、持っているんだけどねえ、それは私、とれませんでした。

ずいぶんね、あの、ぜんそくでなくなった人もいましてね。自殺する人も出てくる状況。だから、ここへくると、ああ、あの人、この家におったなあって、そういう意味では私にとって辛い所なんですね。」

このころ、日本は高度成長のまっただ中、四日市市もさらなる発展をめざして、第3コンビナートの誘致にいっしょうけんめいでした。高度成長の影で公害病患者は増え続けていきました。そんな中、立ち上がった人々がいました。山本さんは、当時公害を発生させている企業に勤めていました。

山本さん

「自分の会社の煙が患者をつくっているとはね、全然思ってなかった。しかし、公害反対運動で活躍されている人たちとつきあうようになって、患者がいるという事実を知らされ、患者に出くわすような状況の中で、自分自身がどんどん、どんどんもう少し真剣に考えなければと思いました。澤井さんたちといっしょにあるグループを作って、公害反対運動をやっています。塩浜駅前でビラ配りをしました。



紙袋をかぶって配っている人もいました。そのときに顔を隠さない人もいましたが、その人は転勤になりました。やりにくかったけど、私は割り切っていましたし、会社はそれなりに私の動きを気にして意識していたと思いますが、私はその辺を全然気にもせず、割り切って参加していました。」

まだ、一般市民より企業や行政の力がはるかに強かった時代、企業を相手取ってたたかうのは、ありが巨人に向かっていくようなものでした。

野田さん

「私はこれ、どうしたらええのかなあと、私は公害のために体までこわして、ようけ死んでいった人もおると、苦しくて、助けてくれと裁判を起こし、努力するのはあんたらとちがうのかと、漁師なかまの呼びかけもあったよ。」

日本で初めての大気汚染訴訟。マスコミが大きく報道する中、全国の関心が集まりました。原告はぜんそくに苦しむ患者 9 人。野田さんもその一人です。

澤井さん

「原告は、塩浜病院の空気清浄病室に入院しとったのですが、その人たちが 9 人そろって裁判に来られたのはね、54 回の中で 2 回ぐらいしかなかった。しかも、来ても発作を起こしてだれかが救急車でまた塩浜病院に帰るという状況だった。」

裁判で決定的な証拠となったのは、当時、三重県立大学の吉田教授の研究でした。地道な調査で工場が出す亜硫酸ガスとぜんそくに因果関係があると裏付けたのです。1967 年に始まった裁判は、1972 年 7 月 24 日、およそ 5 年の歳月を経て、判決がくだされました。原告側、勝訴です。

澤井さん

「もし、あの裁判をやってなかったら、あるいは野田さんたちが負けておったら、もっともっと四日市の市民だけでなく、全国の大気汚染の地域の人たちは、もっと苦しいおもいをしたと思うんですけで、まあ、野田さんたちが勝ってくれたもんですからね、その結果として四日市だけじゃなくて、当時 41 カ所合った大気汚染地域の人も、患者救済制度が施行されて、ずいぶん助かったんだと思います。」

四日市公害裁判はその後の公害裁判の大きな指針となり、企業や行政は住民の健康被害に対し責任を求められることになりました。1972 年に改正された三重県公害防止条例は全国に先がけ、工場から出る硫黄酸化物の総量を規制しました。その 4 年後、行政と事業者の取り組みで、四日市は国の環境基準をクリアしました。そして四日市市は二度と公害を起こさないという決意で、今年 5 月、市内企業 46 社と公害防止協定を再締結しました。

四日市と言えば、ああ公害の町ねと言われる、ぼくはそんなイメージをとりのぞきたいと磯津にやってきました。そして、そこで見つけたものは、公害の犠牲になった人々や公害とたたかってきた人々でした。

山本さん

「空気はだんだん良くなってきているんだけど、あとは緑と接する所がねえ・・四日市は公園が少ないですよ。」

澤井さん

「あの、もっと市民が水辺に接することができるようなそんな環境をやっぱりつくってほしいなと、そうしたらね、いろいろごちゃごちゃいわなくても、ああ四日市は良くなったなあってね、うん、目に見えて良くなるんでね。ぜひ、それを、実践してほしいなというふうに思います。」

野田さん

「今は昔の伊勢湾の魚と同じ味がする。自然は戻ってきておるのだから、魚は食えるから、今度はね、人間の頭の中を入れ替えないとあかんわな。人が生きる限り、必要な施設であるから、これはこのままおって、そうしてこの中で起きるトラブルを自然の中に出さんように、これが今後の人間の課題やと思う。ともかくさあ、人間が月や星まで行く時代なっとなので、こんなもんぐらい使いこなす技術を身につけやなあかんわさ。」

ぜんそく患者の苦しみや死、必死の裁判、人々の公害撲滅の運動、一つ一つの積み重ねがなければ、裁判での勝訴もなく、公害が改善されることもなかった。いま、ぼくたちが住む四日市は、きれいな水が流れ、緑と青空に囲まれています。この水も空気も公害問題に立ち向かった先輩たちのおかげです。」